

自由に使える読書感想文使用条件

① コンクール・コンテスト等の応募には使用
しないこと。

② 学校提出用に関り著作権フリー、そのまま
使ってもいいし、手を加えるのも可としま
す。

③ パクリ・コピーがばれても、自己責任（悪
いのは自分）とし、センセイに思いつきり
しかられること。

④ パクリ・コピーがばれるかどうか不安なら
ば使用しないこと。

⑤ パクリがばれそうになったら「これはオリ
ジナルだ！」と最後まで言い張る根性を見
せること。

⑥ 他のホームページに転載しないこと。

⑦ 他のホームページから読書感想文へ直リン
しないこと。

⑧ 「読書感想文」から解放された時間で夏休
みのすてきな思い出を作ること。

そんな下人にとって、羅生門は飢えて朽ち果てるのか、盗人になっての生き延びていくのか岐路となる。

京都の町は荒れ果て、羅生門はいつからか、死体の置き場になっていた。ここでひとつ確認しなければならぬことがある。舞台となる羅城門は京都の表玄関である。京都は風水の思想に基づいて設計された都市だ。とくに羅城門と朱雀大路を挟んだ西寺と東寺は、風水的には都を守る重要な拠点である。当時の荒廃した様子が伝わってくる。

楼の内には幾体もの死体が置き去りにされている。そこにあるものは、人間のとうようりむしろ生き物の残骸と表現した方がふさわしいものなのかもしれない。これから追られる選択の関頭に相応しい場所である。

そこで下人は檜皮色の着物を着ている老婆と出会う。檜皮色の着物は、元からその色ではなかつたはずだ。死体の血が染みついてそのような色になってしまったのだらうか。老

婆の垢が染みついて変色してしまったのだろ
 うか。いずれにしても老婆の荒んだ生活を象
 徴している色として描き出されている。檜皮
 色の着物は、『蜜柑』で描写されている鮮や
 かな色彩表現とは対極である。
 老婆は放置された死体から、髪の毛を抜い
 ている。死者に対してこのような行為をして
 いる老婆を下人は問いつめる。盗人になるの
 をとどまらせている良心からだった。
 「この女は蛇を干し魚と偽って売った。だが
 生きるための術なのでしかたがない。だから
 わたしのしていることも、この女は大目にみ
 てくれるだろう」。老婆の理屈だった。
 肉食が禁止されていた当時、蛇の肉を食わ
 せたのはの大罪だったのかもしれない。ゲテ
 モノである蛇の肉を偽って売ったというより
 も、食べてはいけない肉を食べさせたのは、
 よほど道義に反した行為だったのだろう。
 この話を聞いた下人の良心は堰を切ったよ
 うにある方向へ向う。文中では「勇気」と表

現されているが、生きることへの選択である。
 「おまえがしているようにしなければ、俺が
 飢え死にしてしまう」と、檜皮色の着物を盗
 み取ってしまおう。この瞬間から、下人は人間
 としてではなく、生物として生存を選択する
 こととなる。
 生物は「生きるためにはどんな無様なこと
 をしてでも生き延びる努力をする」と聞いた
 ことがある。地球の環境が変わると、形態を
 も変えてしまう。隕石の衝突で地上が灼熱地
 獄となれば、姿を変えて地下へ、深海へと避
 難する。そして、何千万年もの間そのときが
 来るのを待ち続ける。
 わたしたちの祖先である小型のほ乳類も、
 惨めに逃げ回りながらもそのときを待って生
 きてきた。だからわたしたちが存在する
 生きるというのはわたしたちが考えている
 以上に、グロテスクで懸命なものなのかもし
 れない。後天的に身についた「盗みはいけな
 い」という常識がどれだけの重みを持つのか

生物として生きるか死ぬかを選択を迫られた
 としたならば、わたしには答えることはでき
 ない。
 「下人の行方は、誰も知らない」で、『羅生
 門』は終わる。
 もしもこの一文が、「下人は役人に捕まり、
 強盗の廉で処刑された」や、「盗人である自
 分の中にいまだ存在する良心と葛藤しながら
 も、下人は最後には善人になった」では、こ
 れほどまでに生きるとはどういうことなのか
 とわたしは考えただろうか。何とも言えない
 憂鬱な余韻が残っただろうか。
 芥川龍之介は三十五歳で自殺する。命と引
 き替えに書き続けたのかもしれない。
 生きる本能をも凌駕してしまう芥川龍之介
 の創作活動のすさまじさに鳥肌が立つよう
 気がする。命の代償のひとつが『羅生門』最
 後の一文であるように思えてならない。